

日本人学習者の英作文における人称代名詞について

小林 雄一郎 (大阪大学)
kobayashi0721@gmail.com

1. はじめに

母語話者は、どうして非母語話者の英語が母語話者によるものではないとすぐに分かるのであろうか。杉浦 (2004) が指摘するように、TOEFL で満点を取るような非母語話者であったとしても、発話された音声を聞くとすぐに非母語話者であることが悟られてしまう。また、発音が関係ない作文であっても、非母語話者の作文は一目で母語話者に見破られてしまう。一体それは何故であろうか。言い換えれば、母語話者と非母語話者の作文との差は何か。

小林 (2009) は、*metadiscourse markers (MDM)* の頻度を説明変数として、変数増減法を用いた判別分析を実行し、90%の精度で母語話者の作文と非母語話者の作文を分類した。また、その変数選択の過程で、最も判別に寄与している変数が Hyland (2005) で *self-mentions (SEM)* と呼ばれる一人称代名詞 (*I, my, me, mine, we, our, us*) の頻度であることが明らかにされた。

本研究は、日本人の中学生、高校生、大学生、そしてアメリカ人大学生による英作文コーパスを対象に、論説文における一人称代名詞の頻度と用法を分析するものである。

2. 研究の背景

書き手や話し手の可視性に関わる言語的特徴は、個人の感情や態度の表出、読み手とのやり取りに使われ、言語の対人的機能の1つである (Halliday 1985)。

モードの違いに関しては、話し言葉では、話し手が「一貫性よりも経験的な関与を優先しなければならない」のに対して、書き言葉では、書き手は「どんな人が、いつ、どこで読んでも一貫性があるって弁護できるような文章を作成することに最も心を砕かなければならない」(Chafe 1982)。また、レジスターごとの言語用法を計量的に示した Biber *et al.* (1999) によれば、一人称代名詞は話し言葉に顕著な語彙であり、学術散文のような書き言葉ではあま

り使われない。

しかしながら、英語を母語としない学習者による英作文は、いくつかの点で話し言葉に近い特徴を持っており、一人称代名詞などが過剰に使用される傾向があると報告されてきた。

例えば、Petch-Tyson (1998) は、ヨーロッパ系の諸語 (オランダ語、フィンランド語、フランス語、スウェーデン語) を背景とする英語学習者とアメリカ人の母語話者の英作文を比較し、学習者が書き手/読み手の可視性に関する言語表現を頻繁に用いていることを明らかにした。また、Cobb (2003) は、ケベックのフランス語を背景とする学習者が、母語話者よりも一人称と二人称の代名詞を過剰使用していると報告した。同様に、McCrostie (2008) も、日本人学習者、スウェーデン人学習者、フランス人学習者、そして、アメリカ人の母語話者の英作文を比較し、学習者が母語話者よりも一人称と二人称の代名詞を好むことを示した。

これらの先行研究は相互に関係したものであり、異なる母語を背景とする学習者による言語使用を比較検討するのに有益なデータを提示している。しかしながら、その殆どは大学生レベルを対象としたものであり、中学生や高校生のような初学者についてはそれほど明らかにされていない。従って、同一の母語を背景としながらも異なる学習段階にある学習者のデータを比較し、一人称代名詞の習得過程に光を当てることは、非常に重要なことである。

3. 研究の目的

本稿の目的は、日本語を背景とする中学生、高校生、大学生、そしてアメリカ人の母語話者による英作文を計量的に解析し、とりわけ一人称代名詞の頻度と用法に光を当てることにある。また、本研究で得られた結果を前掲の先行研究の結果と比較し、母語による違いや習得段階による違いの分析も試みる。

4. データ

本研究では、JEFLL Corpus¹、ICLE-JP²、LOCNESS³の3種類のコーパスをデータとして使用する（総語数は661043語）。

JEFLL Corpus は、日本の中学生と高校生による自由英作文を集めた学習者コーパスである（約60万語）。本研究では、ICLE-JP および LOCNESS とのデータの整合性を考慮し、論説文のデータのみを分析対象とする。ICLE-JP は、日本の大学生による英作文（論説文）を集めた学習者コーパスである（約17万語）。まもなく一般公開される予定だが、本研究では、著作権者の許諾を得てプレリリース版を分析対象とする。LOCNESS は、英米の母語話者による英作文を集めたコーパスであり、ICLEの参照コーパスとして設計された（約30万語）。これは、コーパス作成者である S. Granger か S. De Cock にコンタクトを取ることで入手可能（有償）である。本研究では、アメリカ人大学生による論説文のみを分析対象とする。

表1は、本研究で使用するデータとその総語数をまとめたものである。なお、表中の JH, SH, UNI, NS は、それぞれ中学生、高校生、大学生、母語話者を表している。また、作文タスクの詳細については、投野（2007）および Granger（1998）を参照されたい。

表1: 使用データ

	JH	SH	UNI	NS
corpus	JEFLL		ICLE-JP	LOCNESS
<i>n</i>	2921	2453	327	176
tokens	162919	179750	168800	149574

5. 結果と考察

5.1 生起頻度

表2は、4つのデータにおける一人称の代名詞の粗頻度をまとめたものである。また、図1は、10万語あたりの相対頻度を視覚化したものである。なお、語彙検索は AntConc⁴で行なった。

表2: 一人称代名詞の粗頻度

	JH	SH	UNI	NS
I	18219	16059	4750	677
my	4098	3936	653	210
me	566	1000	260	82
mine	26	31	7	5
we	555	1137	2506	434
our	93	220	406	330
us	65	166	287	277

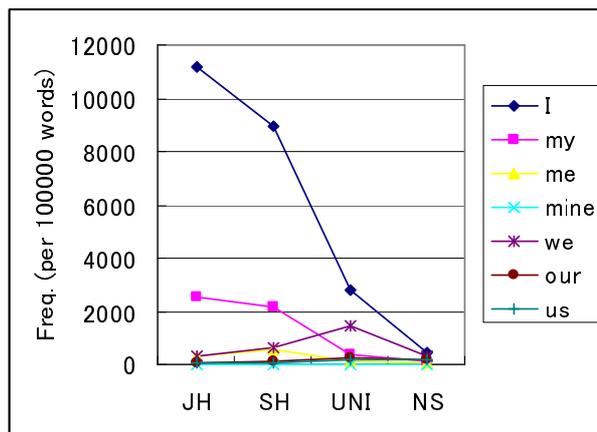


図1: 一人称代名詞の相対頻度（10万語あたり）

図1を見ると、英語習熟度が低い（学年が低い）ほど、一人称単数主格の *I* を有意に過剰使用する傾向にある ($\chi^2 = 21680.57$, $df = 3$, ***)。また、一人称単数所有格の *my* にも、同様の傾向が見られる ($\chi^2 = 5448.33$, $df = 3$, ***)。

引用(1)は、中学生による英作文の例（全文引用）である。書き手によるスペリングや文法の誤りは、そのままにしてある。

- (1) I often eat rice in the morning.
I drink milk everyday.
I like milk very much.
I sometimes eat bread.
I like bread a little.
I eat breakfast everyday. (JH)

先行研究が報告しているように、一人称代名詞の過剰使用は、学習者による英作文の特徴、あるいは「非母語話者らしさ」である（因みに、Ädel (2008) が指摘しているように、学習者は、untimed essay よりも timed essay で、一

¹ http://scn02.corpora.jp/~jefll03/jefll_top.html

² <http://cecl.fltr.ucl.ac.be/Cecl-Projects/Icle/icle.htm>

³ <http://cecl.fltr.ucl.ac.be/Cecl-Projects/Icle/LOCNESS1.htm>

⁴ <http://www.antlab.sci.waseda.ac.jp/software.html>

人称代名詞を有意に多く使う)。そして、一人称代名詞の過剰使用は、学年が低いほど顕著である。前述のように、一人称代名詞は、話し言葉に顕著な言語項目であり、学習者による書き言葉が話し言葉に近い特徴を持っていることの証左となる。これは、恐らく、近年の英語教育がコミュニケーション重視となってきたことと無関係ではない。

そして、この傾向は、大学生による論説文にも見られる。引用 (2) は、大学生による英作文の一部である。

(2) When **I** was high school eleventh grad, **I** went to America with all of **my** class mates and **my** classroom teacher to study English. **We** visited for 3 weeks. All of **my** classroom students and **I** had a lot of experiences. For example, when **I** arrived at America, **I** must through “declaration” then, **I** had to speak English. When **I** spoke declaration man, **I** was very ashamed. **I** knew what **I** had to say, but **I** couldn’t speak well. (UNI)

Hyland (2001, 2002) が指摘しているように、SEM は、書き手の存在を前景化する強力な修辭的戦略である。しかしながら、論説文においては、書き手の存在はテキストの背後にあり、それ故、書き手がテキストの前面に出てきたときに修辭的効果が生まれるのである。言い換えれば、基本的に「客観的」なトーンを持ったテキストに突如「主観的」なトーンが現れるからこそ、そこが強調されるのである。だが、前掲の引用のように、学習者の英作文では、基本的なトーンが「主観的」であるため、SEM の修辭的効果は生まれていない。むしろ、書き手の存在が常に前面に出ているために、論説文に必要とされる客観性が殆ど見られない。

5.2 コロケーション

これまで見てきたように、一人称代名詞（特に、一人称単数主格）の過剰使用は、英作文における顕著な「非母語話者らしさ」であった。では、非母語話者および母語話者は、一人称単数主格の *I* をどのような語とともに用いているのであろうか。

表 3 は、*I* の直後 (R1) に現れる語を頻度の高い順にまとめたものである。

表 3: *I* のコロケーション (R1)

Rk	JH			SH		
	Word	Freq.	%	Word	Freq.	%
1	will	326	10.88	have	263	8.77
2	like	319	10.65	will	256	8.54
3	do	282	9.41	do	241	8.04
4	have	203	6.78	like	179	5.97
5	want	191	6.38	want	173	5.77
6	usually	151	5.04	think	155	5.17
7	'm	122	4.07	usually	102	3.40
8	eat	102	3.40	can	97	3.24
9	think	92	3.07	eat	97	3.24
10	can	76	2.54	'm	95	3.17
Rk	UNI			NS		
	Word	Freq.	%	Word	Freq.	%
1	think	991	20.86	have	62	9.16
2	want	269	5.66	feel	42	6.20
3	can	234	4.93	think	41	6.06
4	was	206	4.34	was	37	5.47
5	have	202	4.25	would	32	4.73
6	am	188	3.96	'm	30	4.43
7	don'(t)	175	3.68	am	27	3.99
8	will	96	2.02	know	24	3.55
9	had	82	1.73	believe	22	3.25
10	thought	79	1.66	had	18	2.66

英作文における内容語（名詞、動詞、形容詞、副詞）の頻度は作文のトピックと無関係ではないため、表 3 の解釈には注意が必要である。事実、中学生と高校生が *eat* という動詞を高頻度で用いているのは、明らかに「朝食にパンとご飯のどちらを食べますか」という課題の影響である。

しかしながら、非母語話者が *will* や *can* のような現在形の法助動詞を好む一方で、母語話者が *would* という過去形の法助動詞を好んで使っている点は注目に値する。母語話者は、(3) のような認知的用法で *would* を用いている。

(3) Therefore, it **would** be difficult to control what goes on in the barracks. (NS)

また、動詞の時制に注目すると、中学生と高校生は、現在形の動詞 (e.g. *like, do, have, want, eat, think*) ばかりを用いている。それが大学生 (および母語話者) になると、現在形だけではなく、過去形の動詞 (e.g. *was, had, thought*) も用いるようになる。過去形は、中学校の英語教育の早い段階で導入される。それにもかかわらず、英語習熟度が低い非母語話者は、現在形の動詞を中心に文章を組み立てて

いく傾向を持っている。

そして、*I* の直前 (L1) に現れる語に注目すると、非母語話者に特徴的な誤用が明らかにされる。⁵ 通常、主語位置に自分と他人を並列する場合は、*X and I* のように、自分を後ろに持ってくる。しかしながら、中学生、高校生、大学生の英作文の中に、*I and X* とのような表現がそれぞれ 28 回、13 回、5 回現れている (母語話者の作文では、1 回も現れていない)。

(4) **I and** my mother will be happy. (JH)

このような用法は、必ずしも文法的な誤りとは言えないのかも知れない。実際に、書き手の意図は、読み手に伝わるであろう。しかしながら、このような表現が「非母語話者らしさ」の一因となっていることは明らかである。

6. おわりに

本研究では、一人称代名詞の使用に関して、母語話者と非母語話者の英作文を比較した。その結果、非母語話者には、一人称代名詞の過剰使用が見られ、コロケーションの観点からも母語話者とは異なる用法が確認された。

註

本研究の一部は、第 22 回「英検」研究助成 (研究部門) 「テキストマイニングによる学習者作文における談話能力の測定と評価」によって行なわれたものである。

参考文献

- Ädel, A. (2008). Involvement features in writing: Do time and interaction trump register awareness? In G. Gilquin, S. Papp, & M. B. Díez-Bedmar (Eds.), *Linking up contrastive and learner corpus research* (pp. 35-53). Amsterdam: Rodopi.
- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *Longman grammar of spoken and written*

English. Harlow: Pearson Education.

- Chafe, W. L. (1982). Integration and involvement in speaking, writing and oral literature. In D. Tannen (Ed.), *Spoken and written language: Exploring orality and literacy* (pp. 35-53). Norwood: Ablex.
- Cobb, T. (2003). Analyzing later interlanguage with learner corpora: Quebec replications of three European studies. *Canadian Modern Language Review*, 59, 393-423.
- Granger, S. (1998). The computer learner corpus: A versatile new source of data for SLA research. In S. Granger (Ed.), *Learner English on computer* (pp. 3-18). London: Longman.
- Halliday, M. A. K. (1985). *An introduction to functional grammar*. London: Arnold.
- Hyland, K. (2001). Authority and invisibility: Authorial identity in academic writing. *Journal of Pragmatics*, 34, 1091-1112.
- Hyland, K. (2002). Humble servants of the discipline? Self-mention in research articles. *English for Specific Purposes*, 20, 207-226.
- Hyland, K. (2005). *Metadiscourse: Exploring interaction in writing*. New York: Continuum.
- McCrostie, J. (2008). Writer visibility in EFL learner academic writing: A corpus-based study. *ICAME Journal*, 32, 97-114.
- Petch-Tyson, S. (1998). Writer/reader visibility in EFL written discourse. In S. Granger (Ed.), *Learner English on computer* (pp. 107-118). London: Longman.
- 小林雄一郎 (2009). 「NS/NNS テキスト分類モデルに基づく日本人英作文の特徴抽出」『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集—デジタル・ヒューマニティーズの可能性』 (pp. 261-268)
- 杉浦正利 (2004). 『なぜ英語母語話者は英語学習者が話すのを聞いてすぐに母語話者でないとわかるのか』平成 13 年度～15 年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書.
- 投野由紀夫 (編) (2007). 『日本人中高生一万人の英語コーパス“JEFLC Corpus”：中高生が書く英文の実態とその調査』 東京: 小学館.
- 堀正広 (2009). 『英語コロケーション研究入門』 東京: 研究社.

⁵ 堀 (2009) は、中学生と高校生の作文に関して、同様の指摘をしている。